

吳昌碩の石鼓文臨書について

著者	松村 茂樹
著者別名	MATSUMURA Shigeki
雑誌名	中国文化：研究と教育
巻	60
ページ	116-123
発行年	2002-06-29
URL	http://doi.org/10.15068/00150377

吳昌碩の石鼓文臨書について

松村茂樹

はじめに

清末民初、海上派と呼ばれる上海書画壇の盟主として活躍した吳昌碩（一八四四—一九二七）は、詩書画印四絶を誇ったが、その書、とりわけ石鼓文の臨書は高く評価され、吳昌碩芸術の根幹とされている。

吳昌碩の四男・吳東邁は、「彼は書法において最も石鼓文の臨書を重んじ、生涯、これに精力の限りを尽くした」とし、さらに、石鼓文臨書によって得た用筆を他の書体や画にも応用したと述べている。この見解は当を得ており、吳昌碩芸術を考える際の共通認識になっていると言えよう。ただ、吳東邁、およびその他吳昌碩を語る多くの人々が、吳昌碩は石鼓文の臨書を書法研鑽のためにしていると考えている。もちろん、その側面もあるだろう。だが、筆者は、吳昌碩が書法研鑽のためだけに「生涯」石鼓文の臨

書に「精力の限りを尽くした」とは思えないのである。では、吳昌碩にとって、石鼓文の臨書とは何のためのものだったのか。本稿では、この問いに、筆者なりの仮説を提出し、論証を試みたい。

一、阮刻石鼓文臨書の理由

吳昌碩が臨書した石鼓文については、伏見冲敬氏が次のように述べている。

吳昌碩の生涯拠つたところの『石鼓文』は、清代に摹刻した本で、今日の人々は問題にもしないようなものである。石鼓の拓本として、明代以来蔵書家として有名な、浙江省鄞県の范氏天一閣所蔵の宋拓本は、もつとも精善と称されていたが、それを嘉慶二年（一七九七）に、その地に浙江全省学政であつた阮元が重刻し、杭州府学の明倫堂の壁間に嵌置した。吳昌碩のこの臨書に、

「右、阮刻北宋本獮碣の字を臨す。」とあるのは、すなわちそれである。²⁾

つまり、吳昌碩は、阮元（二七六一—一八四九）が重刻した石鼓文を、「生涯」臨書していたわけである。ここで伏見氏は、阮刻本を「今日の人々は問題にもしないようなもの」とされているが、明の安国旧藏本をはじめとする、すぐれた宋拓本の影印本を容易に見ることができるとは、決して、確かにそうなのかもしれない。だが、吳昌碩は、阮刻本だからこそ、こだわったのではなからうか。なぜなら、吳昌碩にとって、阮元は祖師であるからだ。

吳長郡「吳昌碩先生年譜」³⁾によると、吳昌碩は一八六九年、二十六歳の時、杭州の詒経精舎に入學し、翌年まで在學、さらに一八七三年にも在籍している。この詒経精舎の創設者こそが阮元なのである。当時、阮元はすでに世を去っていたが、創設者を尊ばない学舎などあり得ない。詒経精舎の学生にとって、古文学派経學の泰斗・阮元は、絶対的な崇敬対象であり、自らも阮元のようになりたいたいと思っていたことであろう。阮元のようにとは、すなわち、古文学派の学者として身を処すことである。当然、吳昌碩も例外ではなかったはずだ。なぜなら、学者としてのものする篆刻書法は風雅なものであり、評価も高いが、学者でない者

が弄する篆刻書法は、小技にすぎないからで、そもそも自らの篆刻書法のステージを高めるために、吳昌碩は詒経精舎に入學したのであるから。

そんな吳昌碩が古文学派の学者として身を処すために選んだことこそ、出身校の創設者、つまり祖師たる阮元が重刻した石鼓文の臨書を「生涯」行うことだったのではあるまいか。

二、学者としての石鼓文臨書

前出伏見氏は、「全くの想像であるが」としつつ、吳昌碩と石鼓文の出会いを、「三十代の後半に寄寓していた」吳雲の家にあつた拓本を見て、それから石鼓に興味を持ちはじめたのではあるまいか」と述べられているが、やはりそれより先、詒経精舎で阮刻本を見たと考えの方が自然であろう。詒経精舎において、阮刻本（正式名は「儀徵阮氏重樵天一閣北宋石鼓文本」）は、學術的対象であり、阮元の訂になる『詒経精舎文集』卷三には、趙春沂「重樵天一閣北宋石鼓文考」、吳東発「重樵天一閣宋本石鼓序」、嚴杰「重樵天一閣北宋石鼓文考」という三篇の論文が収められている。もとよりこれらは書法手本としての石鼓文ではなく、古文学派のテキストとして阮刻本を論じたものだ。

趙春沂、吳東癸、嚴杰の三名は、『詒經精舍文集』所収「詒經精舍題名碑記」によると、「詒經精舍講学之士」であり、いわゆる教授であったことがわかる。吳昌碩はこの内、吳東癸（二七四七一—一八〇三）に私淑しており、五十九歳時作「篆書聯」款書に、

二〇を昏と解釈し、X〇を暁と解釈するのは、吳侃叔（吳東癸の字）明經の『石鼓說』に見える。⁷

と記し、吳東癸の説をとりあげている。明經は清代では貢生に対する尊称であるが、経書に明るいことへの尊敬が込められているのであろう。

また、七十三歳時作「臨石鼓文六曲屏風」⁸（今井凌雪氏藏）鑑識には、次のようにある。

石鼓の用筆は前輩の持論がおのおの異なる。吳侃叔は「疏古」と言い、朱笥河（朱筠の字）は「疏中に勁を取るのがよい」と言い、張皐文（張惠言の字）は「堅勁不移の氣を有するようすべき」と言う。これに従事すること三十年、いまだその一訣も得られていない。難しいものだ。⁹

これは用筆を論じたものであるが、吳東癸以外の二人も古文学派の学者であり、吳昌碩が「前輩」学者の論に通じていたことが窺える。もとより、これらの学者が「前輩」で

あるということは、自分は「後輩」であり、自らが学者の系列に連なっていることを表明していることになる。

つまり、吳昌碩は、自ら学者として身を処しており、七十三歳時作「獵碣集聯」¹⁰（石鼓文に見える字を集めて書いた対聯）の跋語には、「佳作維、~~レ~~作持、本阮氏」と記し、文字考証の規範を阮元に求めているが、これからは詒經精舍に学んだ古文学派の学者としての基本的姿勢が窺える。

また、石鼓文の臨書を作品としてもする場合も、わざわざ阮刻本を臨書していることを表明していることが少なくなく、たとえば、七十五歳時作「臨石鼓文四屏」¹¹跋語には、「臨阮刻北宋本石鼓字、自視尚有古意」と記しているが、これも、学者として阮刻本を臨書し、古文学派が尊ぶ「古意」を求めたものであることがわがらう。

三、祖師への絶対的信賴

このように、吳昌碩は古文学派の学者として石鼓文を臨書しており、それゆえに、あえて阮刻本にこだわったと思われる。そんな吳昌碩の、いわば阮刻本至上主義を表明したのが、六十五歳時作「臨石鼓文全文」¹²跋語である。長く、全文を掲げておく。

私は篆書を学ぶにあたり、好んで石鼓文を臨し、数十

年これに従事してきたが、その日にはその日の境地があったものだ。ただ、その中の古茂雄秀の氣息は、いまだその一、二しか窺えないでいる。戊申（一九〇八）の秋の終わりに良い紙を得、すぐに阮氏翻刻北宋本の全文を臨した。その第八鼓はなお十二字という多くの字を存しているが、今の拓本にはこれがない。世に伝わる明初麤蠟八鼓はわずかに一つだけ「鼓」字を存しており、好事者はこれを宝としているが、骨董屋がニセモノを作って金もうけをしていることを知らないのだ。私はかつて二絶句を詠じ、次のように言ったものだ。「柞と椶の木の花が風に鳴って古意をあらわすが、穴住まいの中で石鼓は臼にされてしまい悲しみに堪えている。石鼓歌を作った昌黎（韓愈）は涙をぬぐつても尽きず、この鼓はまた字のない碑となった」「劫火がすでに天一閣を仇のように襲っており、大学士・阮元の翻刻本も捜し難くなっている。みだりに明拓に「鼓」字が存すると大言が吐かれているが、字迹鮮明なものにはニセモノが多いものだ」。

この跋語は、冒頭の一節のみがよく紹介され、吳昌碩の石鼓文臨書に対する並々ならぬ研鑽の証左とされてきた。だが、全文を読んでもみると、吳昌碩はここで、「明拓はダメで、阮刻本がいい」という主張を展開していることがわか

ろう。ただ、実のところ明拓とは、宋拓である天一閣本が焼失し、安国旧藏本などがまだ世に出ていない当時であつて、求めうる最良の拓本であつたはずなのだ。つまり、書法的には、翻刻本である阮刻本より、最良の原拓本である明拓を重んじるのは、当然のこととさえ言つてもいいのである。だが、ここで吳昌碩は、書法的な観点に立たず、学問的に正統的な（ニセモノの字がまぎれこんでいない）阮刻本を尊んでいるのである。これは吳昌碩が書法家というより、学者の立場をとっていることの証左となろう。そして、祖師である阮元の手になる阮刻本だからこそ、絶対的な信頼を置いていることが窺えるのである。

四、書法家としての側面

ただ、吳昌碩に書法家としての側面が全くなかつたわけではない。たとえば、七十三歳時作「臨石鼓文冊」¹⁴（盧善啓氏藏）に、次のような跋語が見える。

江陰陳氏適園（陳式金の齋号）蔵の吳讓翁（吳熙載の別字）篆屏は、真力みなぎり、古趣あふれている。私はかつて顧茶邨（顧澂の号）のところで借りて観、数日背臨（原本を見ないで臨書すること）したことがあるが、いまだ一点の靈活（生き生きしたところ）も得ることがで

きておらず、恥ずかしい限りである。⁽¹⁵⁾

ここでは吳讓之の「靈活」を字び得ていないことを恥じているわけであるが、これなどは書法家として石鼓文を捉えていると言えよう。

また、七十五歳時作「臨石鼓全文」⁽¹⁶⁾は阮刻本の全臨であるが、

用筆の細やかさ、力強さは、吳山子（吳育の字）・吳讓老（吳熙載の別字）にくらべると及ばないところがあ⁽¹⁷⁾る。

という一節があり、学者としてより、書法家としての側面が強⁽¹⁸⁾く出ている。

さらに、学者としては否定していた明拓を肯定的に捉えていることもある。たとえば、七十六歳時作「獵碣集聯」⁽¹⁹⁾には、「集明拓獵碣字」と記し、あえて明拓に基づいていることを表明しているし、そもそも、吳昌碩は王氏話雨楼（王楠の齋号）旧蔵という良質の明拓を蔵しているのであ⁽²⁰⁾る。

また、七十六歳時作「臨石鼓文軸」⁽²⁰⁾には、
かつて吳氏兩齋軒（吳雲の齋号）蔵の明拓石鼓を見た
ことがあるが、六舟（達受の号）僧の跋語によると、明
らかに元拓であり、用墨の氣風は古意にあふれ、青黒

く、味わい深いもので、明時の麤蠟八鼓は及びもつかない。ここにこれを背臨する。⁽²¹⁾

という跋文を記しているが、これなどは、完全に「好事者」の拓本談義であり、書法的に石鼓文を覗いていることがわかる。

五、学者から見た書法家

では、吳昌碩に、学者、書法家の両側面がそなわっていることを、どう考えればいいのか。このことに関しては、吳昌碩が直接教えを受けた、詒経精舎主講・俞樾の「書法字学之別」⁽²²⁾という文章が示唆に富む。紹介しよう。

元の陸友仁（陸友の字）『研北雜誌』に、「丹陽の葛魯卿の論書に「晋、宋人の書法は妙絶であるが、必ずしも字学に通曉してはいない」と言っている」とある。また、韓退之（韓愈の字）はもとより書名はないが、字義には心を極めており、「世に文詞をなそうとするなら、識字をおさめるようにした方がいい」と言っている。さらに、韓沢木は八分（隸書）をもつて有名であるが、これを「字知らず」と言っている。

明の楊慎『墨池瑣録』に、「宋史長編」に「宋の太宗

は休日のために王著に筆法を、葛端に字字を問うた」とある。筆法とは古法帖を臨摹することで、字字とは篆意を考究することである。筆法と字字は、もともと一つの道であったが、分かれてしまった。晋、唐以来、筆法にすぐれてはいるが、字字に通じていない者が多い」という。どうやらこの二事は、昔から兼ねるのは難しいようである。筆法家が字字に通じていないことは、漢人が篆書を隸書に変えてしまったことからしてすでにそうなのであって、どうして晋、唐以後の筆法家を責めることなどできようか。

文中にいう「書法」「筆法」を専攻するのが書法家であり、「字学」を追究するのが学者ということになろう。俞樾がここで問題としているのは、「筆法家が字字に通じていないこと」、つまり書法家に学者の側面がそなわっていないことである。これを俞樾は、「責めることなどできようか」と、一見擁護しているようであるが、実はこれは突き放した言いようと言わねばならない。つまり、「晋、唐以後の筆法家」は書法家であり、自分達学者とは一線を画する存在だと断言しているのである。そして、こういつた考えの根底には、書法家より学者が上の存在であるという意識があるの言うまでもない。

おそらく、吳昌碩は、詒經精舎で、この俞樾のような考へに接するうち、書法家專業になつてはならず、あくまで学者であらねばならないと肝に銘じたことだろう。その結果、選択されたのが、阮刻本石鼓文を学者として臨書することだったのであるまいか。ただ、もとより吳昌碩には書法家的側面があるわけで、石鼓文臨書にも当然それが顔をのぞかせることもあるのだろう。

結びにかえて

吳昌碩には、さまざまな側面が混在しているにもかかわらず、単純化して考えられていることが多い。本稿では、吳昌碩の学者としての一面に着目することにより、単純化された書法家、ひいては芸術家像に疑義を投げかけ、その本質解明の一助とすることを目的とした。

吳昌碩は、詒經精舎に学んだことにより、詒經精舎の學問に属することになったはずである。つまり、阮元を祖師とする古文学派の經學者となつたわけだ。これは大きな事實であるが、これまでほとんど取りあげられることはなかった。本稿はこの事實を考証することにより、吳昌碩が本格的には學者であつたこと、そして、その芸術の根幹とされる石鼓文臨書も、本格的には學者としての行為であつた

ことを論じてみた。

さらに、時おり顔をのぞかせる書法家的側面も、学者的側面に優先されることはなかったと推定する。なぜなら、舘経精舎では、書法家より学者が上であったからだ。

注

(1) 吳東邁『吳昌碩』(一九六三・上海人民美術出版社)後に『歴代画家評伝・清』・一九七九・中華書局香港分局に収載、邦訳に足立豊訳『吳昌碩(人と芸術)』・一九七四・二玄社がある。原文は、「他於書法最重臨摹(石鼓)文字、畢生精力尽瘁於此」。

(2) 伏見冲敬「清 吳昌碩 臨石鼓文」解説(『書跡名品叢刊』一三一・一九六九・二玄社)所収。

(3) 吳長郷著、河内利治・北川博邦訳「わが祖父吳昌碩」(一九九〇・東方書店)所収。

(4) 伏見冲敬「吳昌碩臨石鼓文」(『書品』第一〇一号・一九五九・東洋書道協会)所収。

(5) 吳昌碩は、たとえば「説劍図為撲野」詩(『缶廬詩』卷七)所収)其二で、吳東甦を「吾家侃叔事潛脩、貧不深憂道更憂。積古鼎彝煇攷証(劉注・阮氏積古齋彝器款識、朱椒堂、吳侃叔攷釈居多)、想無虛造作鸞虬」と詠じている。

(6) 『生誕百五十年記念吳昌碩作品集』(一九九四・篆社書法篆刻研究会、日本篆刻家協会)所収。

(7) 原文は「全釈作昏、よ、釈作曉、吳昌碩叔胡經石鼓説」。

(8) 青山杉雨編集『近代書道クラフ』No.4「吳昌碩作品集」(一九五六・近代書道研究所)所収。ただしキャプションに「辻本史臣氏所蔵」とあるのは誤植、正しくは「今井凌雪氏所蔵」。

また、拙稿「今井凌雪先生蔵吳昌碩「臨石鼓文」・水墨花卉六曲一双屏風」について(一)〜(八)(『新書鑑』第三〇一〜三二七号・二〇〇一・有限会社雪心新書鑑編集部)所収)では、鮮明な写真を掲げ、分析を加えた。

(9) 原文は「石鼓用筆、前輩持論各異。吳侃叔謂疏古。朱笥河謂宜于疏中取勁。張臯文謂求有堅勁不移之氣。從事卅余年、未能得其一訣。難矣」。

(10) 高木聖雨編著『逝世七十年吳昌碩展吳昌碩作品集』(一九九七・書道研究郁文社)所収。

(11) 同注(6)。

(12) 『吳昌碩臨石鼓文墨迹』(一九七九・上海書画出版社)所収。原文は「予字琢好臨石鼓、數十載從事於此、一日有一日之境界。唯其中古茂雄秀氣息、未能窺其一二。戊申秋抄獲佳楮、亟臨阮氏翻刻北宋本文。其第八鼓尚存十二字之多、而今拓則無之。世伝明初髡蠟八鼓僅存一蒜字、好事者宝之、而不知骨董行中作偽賺錢耳。予曾詠二絶句云：柞槭鳴笳古意垂、穴中為白事堪悲。昌黎滿淚揮難盡、此鼓還成没字碑。劫火已燬天一閣、宏文阮刻費搜羅。漫誇明拓存蒜字、翠墨張皇雁鼎多」。なお文中の二絶句は「書石鼓第八」という題で『缶廬詩』卷四、『缶廬集』卷二に収められており、「蒜」は「微」に作られている。

(14) 王宏編『吳昌碩臨石鼓文精品選』(一九九三・天津古籍書店 所収)。

(15) 原文は「江陰陳氏適園藏吳讓翁篆屏、真力彌滿、古趣橫溢。予曾于顧茶邨処借觀、數日背臨。其意未能得一点靈活、可愧也」。

(16) 前出注(2)『書跡名品叢刊』一三二所収。

(17) 原文は「用筆綿勁、較吾家山子・讓老似有所不逮也」。

(18) 朱培爾主編『二十世紀書法經典・吳昌碩卷』(一九九六・河北教育出版社、広東教育出版社) 所収。

(19) 沈曾邁「記吳缶廬論書瑣聞」(『學風』第七卷第四号・一九三七・安徽省立圖書館 所収) に、「案先生出示所藏明拓本、係王氏(任堂)話雨樓旧物、墨氣極好」とある。

(20) 師村妙石編『吳昌碩四代作品集』(一九九四・吳昌碩芸術研究會 所収)。

(21) 原文は「曾見吳氏兩盤軒藏明拓石鼓、掇六舟僧跋語、的是元拓、用墨氣古勁神味淵、異非明時髣髴所能也。茲背臨之」。

(22) 俞樾『茶香室四鈔』(『茶香室叢鈔』所収) 卷十五所収。

(23) 原文は、「元陸友仁研北雜誌云、丹陽葛魯卿論書云、晋宋人書法妙絶、未必尽晚字学。又云、韓退之素無書跡、而極意字義、嘗云、世為文詞、宜略識字。又韓挾木以八分擅名、謂之不識字。明楊慎墨池瑣錄云、宋史長編、太宗每暇日、問王著以筆法、葛端以字学。筆法臨摹古法帖也、字学考究篆意也。筆法与字学本一塗而分歧。晋唐以来、妙於筆法而不通字学者多矣。按此二事自古難兼、筆法家之不通字学、漢人爰隸已然、何責乎晋

唐以後」。なお「明楊慎墨池瑣錄云」とあるが、「墨池瑣錄」は『書品』の誤りで、楊慎『書品』卷一(卷一のみであるが、表記あり)「筆法字学」にこの一節が見えることを、菅野智明氏よりご教示いただいた。(大妻女子大学)